

スキマ時間にコツコツ



取得した資格：1級土木施工管理技士
資格取得年度：令和6年度

やまうち かずき
山内 和紀*

受験の動機・経緯

私は、社会人になってから、「公務員だから資格なんて特に必要ない」と思いながら仕事をしていましたので、資格を取得することなど全く考えていませんでした（資格試験の勉強が嫌だということが公務員を志望した理由の一つでもありました）。

しかし、職場の課内研修にて、先輩の1級土木施工管理技士の合格体験について発表を聴く機会があり、発表内容が面白く、「自分も受験してみようかな」と、ふと思いついたのがきっかけでした。その後、試験内容についてインターネットで調べてみると、受験の申込み期間が迫っていたこともあり、急いで卒業証明書などの必要書類を取り寄せ、その勢いそのまま申込みました。

第一次検定とその対策

いざ受験申込みをしたものの、勉強が面倒で何もせずにいるうちに、第一次検定の試験日まであと1ヶ月となっていました。さすがにまずいと焦り、先輩の発表で紹介されていたスマートフォンの試験対策アプリ（過去問・解説付き）を思い出してダウンロードしました。

しかし、仕事が終わって帰宅してからは、当時2歳と1歳の2人の子どもの育児に追われ、まとまった勉強時間を確保できませんでした。そこで、仕事の昼休み時間と帰宅後の育児の合間に勉強することにしました。

第一次検定の解答方式はマークシート式であったため、ペンを持って書く勉強は行わず、スマートフォンアプリで過去問を繰り返し解いて覚えました。また、出題科目は「土木工学等」、「施工管理法」、「法規」の3科目で、令和6年度試験からは「土質工学」、「構造力学」、「水理学」の基礎問題も出題されると事前にアナウンスされており、幅広い分野の勉強をしなければなりませんでした。しかし、合格基準は6割で、過年度試験の傾向を確認すると、全てが必須問題ではなく、選択問題も多く出題されていたことから、勉強分野を取捨選択することにしました。私の場合、これまでの業務で全く関わったことがない「海岸」、「港湾」、「鉄道」、「トンネル」等の分野を学習対象から外しました。このような工夫をすることで、スキマ時間での勉強を可能としました。

スマートフォンアプリは手軽に勉強することがができるため、10分ほどのスキマ時間があれば、数問を解くという流れでコツコツ続けました。そして、試験当日は勉強したとおりの出題内容だったこともあり、余裕を持って解答することができました。

第二次検定とその対策

第一次検定の合格発表後、また勉強から遠ざかっていたのですが、第二次検定の試験日1ヶ月前になると、再び焦りを感じて勉強を再開しました。第二次検定対策のスマートフォンアプリは、自分の中でじっくりくるものがなかったので、近所の本屋に

*長野市 建設部 河川課 技師

行って対策本を1冊買いました（記述例が多く掲載されている本を選びました）。

第二次検定の解答方式は記述式で、「学科記述」と「経験記述」の2つに分かれます。学科記述は、「土工」、「コンクリート工」、「安全管理」、「品質管理」等から出題され、穴埋め形式か文章記述形式で解答するので、第一次検定と同様にひたすら過去問を解きました。主に仕事の昼休みに、対策本を持って職場のベランダに行き、声を出しながら勉強していました。繰り返し解くことで、試験本番までには過去10年分の解答をほぼ暗記している状態になっていました。そして、1週間前くらいには、漢字で書けるかチェックするため、ノートに書いて勉強しました。

また、勉強していく中で、仕事での経験もなく、あまり知らない工法等があれば、動画投稿サイトで民間の建設会社が投稿している施工中の動画を見て、イメージを膨らませていました。

次に、経験記述は「安全管理」、「品質管理」、「工程管理」等から出題され、「具体的な現場状況と特に留意した技術的課題、その課題を解決するために検討した項目」、「検討項目の対応処置とその評価」という流れで自身のこれまでの経験について記述します。

まずは、対策本の記述例をひたすら読んで、どのような構成で文章を作成すれば良いのか確認しました。しかし、対策本に掲載されている記述例のほとんどが施工業者目線であり、「発注者側監督員」としてどのように記述すれば良いのかわかりませんでした。

そこで、インターネットで検索すると、発注者の立場で受験された方の体験記コラムが数件あり、記述例も掲載されていたので、文章構成の参考にしました。

その上で、自身が携わった工事を思い出しながら、スキマ時間にスマートフォンのメモ機能に「ネタ」を書き溜め、ある程度溜まった段階で、「安全管理」、「品質管理」、「工程管理」の3テーマの解答文を作成しました。いずれも、実際の基準名や基準値を記載することを意識して作成しました。

また、私は文章作成が得意ではないので、作成した解答文を家族に読んでもらい、不自然な文法や表現について指摘を受け、修正を重ねました。あとはスキマ時間を利用して暗記し、漢字の確認もして試験本番に臨みました。

いざ本番を迎えると、経験記述は「安全管理」と「施工計画」の2テーマが出題されました。しかし、ここで問題が発生しました。私の用意した3テーマの解答文は、それぞれ異なる工事について記述したものでしたが、出題された問題は、1つの工事についてこの2テーマを記述する必要がありました。想定外の出題に一時は焦りましたが、落ち着いて深呼吸し、一から文章構成を練り直しました。スマートフォンのメモ機能で書き溜めたものの、ボツにしたネタをもとに、具体的な基準名と基準値を記載することを意識して、なんとか試験時間内に作成することができました。

受験者へのアドバイス、注意点、励まし等

子を持つ親となってから初めて試験勉強をしましたが、子育てしながら勉強する難しさを感じました。

休日には、妻が子どもを連れて遊びに行き、私が勉強する時間を作ってくれたりもしました。そのような家族の協力や自分なりの勉強方法の工夫で、なかなか時間が確保できない状況でも無事に試験に合格できた時は、本当に嬉しく思いました。

また、この1級土木施工管理技術検定は、令和6年度から受験資格が変更となりました。第一次検定は学歴に関係なく19歳以上の者に、第二次検定は第一次検定合格後の一定の実務経験を有する者となり、原則として1年間で1級土木施工管理技士を取得することができなくなりました。ただし、経過措置として令和10年度まではこれまでの旧受験資格での受験も可能です（私はこの旧受験資格で受験しました）。特に旧受験資格をお持ちで資格取得を検討している方は、令和10年度までの受験をおすすめします。

【著者紹介】山内 和紀（やまうち かずき）

平成7年生まれ。信州大学工学部土木工学科卒。東海地方の地方自治体での勤務を経て、令和3年に長野市に入庁。現職。